

### 講演 文学の力について : 文学は何をなし得るか

TATEISHI, Haku / 立石, 伯

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

85

(開始ページ / Start Page)

4

(終了ページ / End Page)

14

(発行年 / Year)

2012-03

〈講演〉

## 文学の力について

—文学は何をなし得るか—

これから「文学の力について」という題目で話していきます。本年度で私は七〇歳定年になりますが、最終講義はしないつもりですので、学生諸君にも、また卒業生の方にも解っていただけのような内容・テーマで考察したいと思います。

わたし達は現在まだ一種の思考停止状態に陥っている感があります。二〇一一年三月十一日にこれまで体験したことのない恐るべき東北・北関東太平洋沿岸を中心とする自然災害——マグニチュード九超、震度七という大地震、その後二十メートルを超える大津波——に襲われたためです。それに加えて、福島県に設置された東京電力福島第一原子力発電所も地震と大津波に襲われ、原子炉の安全維持機能が損壊して炉心が溶融するという大事故が発生しました。その翌日に原発施設で水素爆発を誘発し、広島の原子爆弾の数倍以上のセシウムを始めとする危険な各種放射線を大気中に散乱させ、また大量の汚染水を東京電力は海に放流して太平洋を汚染しました。日本政府とその関

連団体、東京電力等は、重大な情報を隠蔽し、被害予測の無知を糊塗して、危険な初期対応をまったく無効にしました。また解決のための方法も機器等も十分に有しておらず、被害程度も精確に把握できないために、現在もなすすべもなく広大な地域に甚大な被害を拡大させています。

このような衝撃的な惨状のなかで、わたし達が携わっている「文学」は人々を苦しめ悲嘆のどん底に落している大災害後の現状について何事か適切な表現をなし、人々に自己自身や状況を判読する力や生きていく力を微力であれ提示できるのか、と問われています。つまり、多くの死者を抱えながら生きること自体が困難な人々や壊滅的な状況のなかで、文学や芸術は何事か示唆的で有益な方向性を明示できるのか、ともきびしく迫られています。それは一種の極限的状况のなかでの文学的・人間的な模索であります。わたし達は自らを省みて、自らに懷疑を抱き無力感に陥らざるをえません。

立石 伯

## 文学の力について

今日は、文学の力や表現の基本的な問題を検討するため、幾らかの手続きを踏んでいきたいと思っています。まず表現方法としての記録、虚構の可能性の問題を考察していきたい。次に、それを基盤にして文学・芸術の用・無用、有益・無益、意味・無意味等の問題について論を進めます。そうすると、一定の見通しや考え方を得ることができるはずですが、その認識の上で、結論的に文学の力はどうなるものであり、人間や世界についての未知や将来的な展開にむけてどのようになすべきか示すことができるのではないかと考えています。

最初に〈記録〉文学について考えます。その基本的なあり方やその恐るべき力を武田泰淳の『司馬遷』で瞥見し、その上で大岡昇平の『レイテ戦記』で太平洋戦争・レイテ沖とその周辺海域における海戦の記録、吉村昭の『三陸海岸大津波』で三陸海岸における明治二十九年と昭和八年の大津波の状況、若松丈太郎の『福島原発難民』で福島原子力発電所事故による災害の様相を把握していきたいと思えます。

武田泰淳は、戦後文学者で大雑把にいつて、社会変革としての社会主義、中国の問題、仏教（宗教・僧侶）とは何か、戦争と戦争体験のあり方など四つほどのモチーフを複雑な回路を設定しながら生涯かけて追究しつづけた作家です。彼は二五歳・昭和十二年に日中戦争が勃発しますと、徴兵され、中国戦線に派遣されます。それまでに家が浄土宗の僧侶の家であるために僧侶の資格を取っていましたが、旧制浦和高校時代には左翼運動のために逮捕されたり、東大で竹内好、増田渉などと当代中国文学研究に携わっていました。中国と中国現代文学に親炙し、

また僧侶であるものが殺人のともなう兵士として大陸に渡るという背理に直面しました。このような体験をもとに、彼は、再び徴兵されるかもしれないという危惧もあり、中国大陸でその後の戦争の推移を把握しようと上海に渡りました。しかし、どうなるかは解らないという不安から、彼はたまたま執筆を依頼された『司馬遷』を、一種の遺書として書き残したといえます。その書のなかで、彼は右に記したさまざまな省察課題を司馬遷の生涯とその業績に仮託しながら書き進めました。「記録」について端的に記しています。

「歴史家は無為である。また為さざること無し、とも言える」と書き改めてみよう。歴史家はただ、記録するのみである。ただ記録すること、そのみによつて、他のことはなさぬ。しかし彼は、記録によつて、あらゆる事をなすのである。歴史家は、為さざること無し、でなければならぬ。何故ならば、彼は万物の情を究め、万物の主となるのであるから。歴史家の『無為自然』は、記録である。彼自身による記録である。彼は、彼自身による、きびしい記録のために、無為自然のままに書かねばならぬ。それによつて、あらゆる事をなすために。」

（武田泰淳『司馬遷』昭和十八年四月）

武田泰淳は記録という概念にかれ独自の役割をもたせることで史記の世界を構想することができました。この「記録」は恐るべき表現の力をもったものだといえます。

大岡昇平は敗戦まであと一年二ヶ月ほどの昭和十九年・三三歳のとき招集され、戦争の帰趨がほぼ見えた時期に激戦の地、フィリピン諸島のミンドロ島に派遣されました。ハワイから米國機動艦隊が日本めがけて西進し、オーストラリアからマッカーサーの艦隊が北上する交点にレイテ島などは位置していて、帝國空陸海軍最後の激戦地となり、日本の敗戦が明白になった戦闘です。召集前、彼は会社に勤めるかたわらスタンダールの研究者として仕事を始め、小林秀雄などに教わりながら文学研究を深めていた時期です。だが、彼はミンドロ島で捕虜になり、レイテ島の俘虜收容所に収監されます。ミンドロ島での捕虜体験は、「捉まるまで」に、そしてレイテ島に設置された俘虜收容所に収監された後のことを含めた全体を『俘虜記』としてまとめました。同時に彼は一つの極限状況として戦場での人肉嗜食を扱った『野火』、復員兵士の苦悩と姦通を書いた『武蔵野夫人』等の秀作を書き進めましたが、かつての戦場での戦死者、思い屈していた戦友のことを思い、ミンドロ島の戦跡を訪問したり、史料を徹底的に蒐集して、ついに『レイテ戦記』を書く決断をします。これは戦記であるとともに、小説としても優れた作品であり、大岡昇平の代表作といえます。その結末に彼は記します。

「國家と資本家の利益のために、無益な國民の血がそこで流された。日本國民は強いられたい戦いにおいて、その民族的な國家觀念と、動物的な自衛本能によって、困難に堪え、過酷な死を選んだ。軍隊が敗北という事態に直面する

時、司令官から一兵卒に到るまで、人間を捲き込む悪徳と矛盾にも拘らず、よく戦つたのである。(中略)

レイテ島の戦闘の歴史は、健忘症の日米國民に、他人の土地で儲けようとする時、どういふ目に遭うかを示している。それだけではなく、どんな害をその土地に及ぼすものであるかも示している。その害が結局自分の身に撥ね返つて来ることを示している。死者の証言は多面的である。レイテ島の土はその声を聞こうとする者には聞える声で、語り続けているのである。」

(大岡昇平『レイテ戦記』昭和四十九年十一月改訂版)

大岡昇平は、この戦場で戦死した八万人近くにもおよぶ将兵たちにレクイエムを捧げたといえます。彼はアメリカで戦史が公開されるたびに、内容を改訂し、何度も版を改めています。それほどこの作品世界を厳しく凝視し省察しつづけてきました。この戦闘で初めて採用された特攻作戦、戦争遂行能力、戦闘形態、特に将兵の行動の分析などを通して、彼が主張したかったのは、日清戦争からはじまり太平洋戦争までつづいた近代日本の戦争に集約される人間観、文化、國家観、精神のあり方、思考・行動様式などにおいて、日本とは何か、日本人とは何か、日本近代の秘められた諸問題等を考察したのだといえます。

武田泰淳、大岡昇平の文章は記録の本質論、小説として優れています。ところで、三月十一日以降、地震、津波、原発事故等についてのさまざまな文章があります。まず、それ以前に書かれた記録として、吉村昭の『三陸海岸大津波』を見ておきま

す。原題は『海の壁』といいますが、明治二十九年と昭和八年に三陸海岸を襲った大津波等の記録です。

「明治二十九年の大津波以来、昭和八年の大津波、昭和三十五年のチリ地震津波、昭和四十三年の十勝沖地震津波等を経験した岩手県田野畑村の早野幸太郎氏（八十七歳）の言葉は、私に印象深いものとして残っている。

早野氏は、言った。

『津波は、時世が変わってもなくなならない、必ず今後も襲ってくる。しかし、今の人たちは色々な方法で十分警戒しているから、死ぬ人はめつたにないと思う』

この言葉は、すさまじい幾つかの津波を経験してきた人のものだけに重みがある。

私は、津波の歴史を知ったことによって一層三陸海岸に対する愛着を深めている。」

（吉村昭『三陸海岸大津波』原題『海の壁』昭和四十五年七月）

吉村昭は、私小説作家として多くの小説を書く一方で、『関東大震災』や太平洋戦争の将兵や部隊の記録なども広く書いています。『三陸海岸大津波』は被災した人々に寄り添いながら人間と自然の関係を陰影鮮やかに描いて記録として卓越したものがあります。また、人智の及ばない自然の大きな力を逆説的に描出して、後世に大きな示唆を残しているともいえます。

広島・長崎の原爆被爆体験を有する日本では、それに関する多くの小説・記録などをもっています。また、一九五〇年代中頃から原子力発電の開発に手がつけられ、原発が設置され始めた七〇年代から、その本質的危険性や事故が発生した際の対処の不可能性などのため反対運動などがおこっていました。しかし、それらは徹底的に弾圧され、原発設置予定地の住民や科学者、支援した人々や弁護士などは圧倒的な権力、裁判所、体制的思想の前で多くの挫折を味わってきたのも事実です。そのなかで幾らか著書も発刊されましたが、若松丈太郎の『福島原発難民』は、福島での原子力発電所設置が問題になった頃から、その政策の虚偽性や危険性などについて警告しつづけた文章が編纂されたものです。わたしが高校教員をしていたこの人を知ったのは、二〇〇〇年に福島県小高町（現・南相馬市）に「壻谷島尾記念文学資料館」が設立された際、中心的に努力した人だからです。

「一九九四年にチエルノブイリを訪ねた経験をもとに、連詩『かなしみの土地』を書き、原発難民となった人々の思いを代弁したつもりだった。しかし、そのとき彼らの思いだと思っていたものは現在の自分の思いそのものであるという現実のなかに、わたしは置かれている。予測が適中することは、一般的にはうれしいという感情につながることも多い。しかし、危惧したことが現実になったいま、わたしの腸は煮えくりかえって、収まることのないのだ。なぜなら、この事態が、天災ではなく、人災であり企業災で

あるからだ。」

（若松丈太郎『福島原発難民』平成二十三年五月）

人災・企業災として告発した若松丈太郎は詩人でもあり、連詩「悲しみの土地」のなかに「神隠しされた街」という象徴的な詩を書いています。部分を引用するので解り辛いですが、チエルノブイリが福島島の惨禍と二重写しになっています。「四万五千の人びとが二時間のあいだに消えた／サッカーゲームが終わって競技場から立ち去った／のではない（中略）小高町 いわき市北部／そして私の住む原町市がふくまれる／私たちが消えるべき先はどこか（中略）肺は核種のまじった空気をとりこんだにちがいない／神隠しの街は地上にいつそうふえるにちがいない」と。長い詩ですが、本文にあるように、「予測が適中」しているのです。また、「埴谷島尾記念文学資料館」は、原発爆発のために立入禁止区域となっていて、外部からは展示物の散乱などが確認できるだけのようですし、東北地方の博物館、美術館、図書館などの被害も甚大のようです。

右に考察した記録文学、詩などは文学として優れた表現を獲得しています。それと同時に、直截現実的事実などに基づきながら記録された作品ばかりではなく、文学の力を考えるということでは、二番目に「虚構」の方法についても一瞥し、作品創造のために不可欠な観点を再考しておきたいと思います。『鷹』『修羅』『至福千年』『狂風記』など見事な虚構世界を創出した石川淳はその評論で次のような認識を披瀝しています。

「作者はもう考へることの空虚さに堪へられなくなつて、精神の努力の線よりほかに身の置きどころはないと、遺瀨なくさつたけしきである。あとは発明すること以外に何の仕事もない。生活力とは前途の空虚なる空間を刻刻に充実させて行く精神力のことである。その精神力の作用として、日目の営みをしたり、文章を書いたり、いろいろなことをする。それらはみな世界像の一部を形成するところの、今日の現実の上での出来事に相違ない。ただ刻下の現実の相よりほんのすこし速く、一秒の一千万分の一をいくつにも割つた一つぐらゐる速く空虚なる空間を充実させようとする精神の努力を小説だと、ここでたつた一度だけ考へておく。」

（石川淳『森鷗外』昭和十六年十二月）

石川淳の「刻下の現実の相よりほんのすこし速く、一秒の一千万分の一をいくつにも割つた一つぐらゐる速く空虚なる空間を充実させようとする精神の努力」により、わたし達が二〇一一年の刻下の現実を表現できるならば、散文における新しい苦悩と不安に満ちた生の「発見」をすることができるとしよう。石川淳は右にあげた作品等で文字通り一つの歴史的現実のなかで新しい生と人間のかたちをもとめて闘う精神を活写してしました。

埴谷雄高は「不合理ゆえに吾信す」「闇のなかの黒い馬」「死霊」等の作家として畏敬されてきた作家です。埴谷雄高の次の評論は、文学・芸術の基本的な考え方を提示したものであり、

## 文学の力について

わたし達に表現対象と表現方法の一端を開示しているといえます。

「私自身は或るエッセイで、政治を政治たらしめている基本的な支柱は、第一に階級対立、第二に絶えざる現在との関係、第三に自身の知らない他のことに関心をもち熱烈に論ずる態度である、と書いたことがあるが、これに即応していえば、芸術を芸術たらしめている基本的な支柱は、第一に王侯も乞食も貴婦人も娼婦も同一に見るいわば神にも似た視点、第二に絶えざる非現在との関係、換言すればいかなる芸術作品もそれぞれ十年後、百年後の生命をもとうと欲すること、第三にただ自身の見知っており洞察し得たことのみからひたすら出発する態度である、とこの世界に対するかの反世界のごとくにまつたく逆に言い現すことができる。」

(埴谷雄高「悲劇の肖像画」昭和三十五年二月)

埴谷雄高は夢を考察した右と同年の文章「不可能性の作家」で、「客観的な対応物のまつたくないもの、いつてみれば、これまで嘗てなく、また、これからも決してないだろうところのものだけを扱う《不可能性の作家》にまでついに至らなければやまない」という認識も語っていて、虚構の文学や未知のものに挑戦する作品を考える際に、いささか極端な論理だと思われる憾がないわけではありませんが、超越的な現実性を渴望する文学・芸術のありようも示唆しています。石川淳、埴谷雄高

ともに複雑な虚構の文学世界を現実の一精神世界のあり方として提示し、文学の大きな力を開示した作家でした。

記録文学などとして制作され、また虚構小説などとして創造された作品は、さて、読者や時間・歴史から厳しい価値評価の目にさらされることになります。そこで、三番目の検討課題として文学・芸術の有効性・無効性ということに目を転じていきたい。三月十一日以降の文学的動向などを見ていきますと、文学、学問、芸術などはどれだけ現実に対抗できるのか、世界・現実に対して何か寄与しうるのか、といった懐疑に多くの人がとらわれています。それが直ちにその用・無用、有効・無効などの議論にも及んでいるといえます。随分以前の論争になりますが、典型的な解明課題としてフランスのJ・P・サルトルの提起した、二〇億人の飢えた子供がいる時に文学は果して有効か、という問いを考察しましょう。大江健三郎のサルトル認識と自己認識とを同時に引用しておきます。

「(サルトルは)引用者注)……飢えた世界で文学がなにを意味するか。道徳がそうであるように、文学もまた普遍的である必要がある。したがって作家が、すべての人間にむかって話しかけ、すべての人間によつて読まれることを望むなら、かれは大多数の人間の側、飢えている二十億の人間の側に立たねばならない。(中略)

……作家が飢えている二十億のために書くことができないう限り、かれは不安な気分になやまされるはずだ。私が作家に求めるのは、現実と、存在する基本的な問題を無視し

ないことである。(中略)

(はく＝大江健三郎―引用者注) はくは、(飢えた子供が  
いる時に……) という考え方の極に定住することはできな  
いし、個人的な自己救済の極に定住することもできない。  
そのあいだをつねにフリコ運動しているという感覚が、は  
くにとつてもっとも普通な作家としての職業の感覚だ。」

(大江健三郎「飢えて死ぬ子供の前で文学は有効か?」昭  
和三十九年八月)

サルトルの発問は実践的な理性にとつては、二つの課題を同  
時に解決できるか否かを突きつけるもので、それ自体人道的な  
観点から解らないわけではないのですが、文学・芸術に対して  
はいささか性急な問いかけだといえなくはありません。断るま  
でもなく、これに対してクロード・シモンなど当時の若いフラ  
ンスの作家・批評家などから多くの反論・批判がでてきたので  
す。わたしもサルトルの問いかけ方が文学・芸術の現実的功利  
性や実利性に即しすぎた欲求であり、彼自身の優れた「嘔吐」  
を自己否定するなどいささか一面的であり、文学の本質と相容  
れない面をふくんだものだと考えています。

厳しい現実対応の問題とはまた別に、わたし達は文学・学問  
の有する本質的な意味・価値等を確認しておく必要があります。  
森鷗外は次のように的確に表現しています。

「学問はこれを身に体し、これを事に措いて、始て用を  
なすものである。否(しかる)るものは死学問である。これは世間

普通の見解である。しかし学芸を研鑽して造詣の深きを致  
さんとするものは、必ずしも直ちにこれを身に体せようと  
はしない。必ずしも径(た)ちにこれを事に措かうとはしない。  
その砧(こま)として関する間には、心頭、姑く用と無用とを度  
外に置いてゐる。大いなる功績は此の如くにして始て(病)ち  
得らるゝものである。

この用無用を問はざる期間は、甞(た)に年を閲するのみでは  
無い。或は生を終るに至るかも知れない。或は生を累ぬる  
に至るかも知れない。そして此期間に於ては、学問の生活  
と時務の要求とが截然として二をなしてゐる。」

(森鷗外「瀝江抽齋」大正五年一月―五月)

森鷗外の見識は文学・芸術・学問などの根本を貫いたものだ  
といえましょう。わたし達は学問を身に体したり、事においた  
りしないし、「用と無用とを度外」におき、また学問生活で真  
理・真実などを追究しはじめると、生を終つたり、生を重ねな  
ければならないと覚悟せざるをえないと思うこともないわけ  
はありません。現実と理想、当為と必然などのあいだで絶えず  
葛藤しつづけてきたともいえます。

最後に四番目の検討課題に移っていきます。これまで触れて  
きました、記録の力、虚構の可能性、文学・学問の用・不用、  
意味・無意味などをうけて、それではどのようにすべきなのか、  
という点に目を転じたいと思います。断るまでもなく、これら  
はすでに検討したことと一定の見通しとなすべき方向は示唆さ  
れています。それを明確にするためにも、さらに異なった視点



## 文学の力について

から見ていくことにしましょう。わたしの文章を引用して大変恐縮ですが、まずその要点を整理しながら、考えを展開していきたいと思います。

〔彼（引用者注・ドストエフスキイ）はこのような見通しがたい世紀に対して、逆説的な意味で、もつとも重要な叡智を示す予言者となりうるはずである。人類は、いわゆる質的減滅の法則にのっとって、小ぶりになり、かつほとんど矮小化されつつあるような気がする。世界の指導者といわれる者達を見ると疑うことができない。科学の「進歩」をささえるもの達もどうであろうか。彼はこのような厳しい歴史的・世界的見通しに警告を發したのである。（中略）生死の肝腎な機縁を左右する劇薬こそ、服用を工夫することによって、新しい人類の叡智を蘇生するための『いのちの泉』に逆転する何かにほかならないであろう。〕

未知に取りまかれたわたし達の精神の努力はここからはじまる。（中略）わたし達がまだ十全に判読も謎ときもできない未来の『ドストエフスキイという標的』にむかっている積極的な想起は、わたし達が取りまかれてるさまざまな性質の未知の闇に一点の明るい燭光をさしかけてくれるものとなるはずである。〕

（『ドストエフスキイの（世界意識）』平成二十一年十一月）

わたしの指摘したかったことの一つは、日本・世界における文学・芸術、科学、政治、経済、文化などを支えている人々の

「質的減滅」の目に見える進展であります。劣悪化が進んでいきます。それを日の下にさらしたのが、今度の東京電力福島第一原子力発電所の事故です。あくまでも原子力や放射線防衛学や核問題が中心ですが、それに加えますと地震学、地球物理学、医学、環境論などが包摂され、日常的現実的な電力が介在しているために、政治、経済、社会、歴史などがその範囲のなかに入ってくるといえます。

わたしは皮肉をこめていたのですが、いわゆる「御用学者」という言葉は死語になったのではないかと、少なくとも成熟した社会では、逆説的な意味で、御用学者的なものが多すぎてあまり表面化しないものだとも錯覚していました。しかし、これだけ「犯罪」的ともいえる御用学者が多すぎて溢れかえっている現況には怒りを通り越して、啞然とするほどでありましたし、現在もそうです。元來権力に取り入る学者などは多くいすぎて、侮蔑をもって遇するしかありませんが、膨大な毒流すということになりますと、座視しておけない気分になります。彼等はこれまで原子力平和利用の名の下に、原子力発電所を五四基も建設し、経済の発展、原子力利用の安全確保に資するための学問の高度化を推進するとして莫大な研究費を浪費してきただけだと思います。ただ、巧妙に運営していたために、その実態は闇のなかに隠蔽されていました。学界、政治、経済、官僚、マスコミなどが周到な網の目を張り巡らして、その大本を明らかにできない仕組み、組織を造りあげていたといえます。これは醜劣な犯罪の五つの環と呼びたいほどであります。このような風潮のなかでも、数少ない良心的な学者は率直に

発言していました。ここで梅原猛のコラムの記事を取りあげるのは、批判的な目的となりますので、いささか適切ではないように見えますが、他の人でこれほど解りやすいかたちで事実の経過と個人の対応を明らかにした人は寡聞にして知らないため、あえて触れていきます。

「たしかに私は一九九六年にこの欄で、原発は三十年かけて廃止すべきであると論じ、一九九九年と二〇〇二年に同様の主張をつづけた。とすれば、今回の事故で不幸にして私の予言は的中し、私には先見の明があったということになるが、私はそれがある種の深い自省の心で振り返らざるを得ないのである。(中略、改行なし) 私は東京電力の社長、会長を務め、経団連の会長も務めた故平岩外四氏と同郷であり、かなり親しかった。(中略、改行なし) また私が初代所長を務めた国際日本文化研究センターを援助する国際日本文化研究交流財団の理事長に関西電力の社長、会長を務めた小林庄一郎氏が就任してくださった。小林氏はこの財団の設立に献身的ともいえるべき貢献をされた。たとえば国際研究集會にレヴィー・ストロースなどの超一流の学者を招いた際、公費だけではとてもその費用がまかなえなかった。小林氏のおかげで財団には十分な寄付金が寄せられたが(以下略)」

〔思うままに〕「東京新聞」平成二十三年五月二日

梅原猛は世話になった人のことを考えると、「私の反原発の

筆は鈍らざるを得なかったが、今はそれを後悔しているのである」と述懐し、また「今回の災害は人災であるとともに文明災である」と判断した。後者の判断には、違和感を抱くがそれはここでは措き、前者の「後悔」は、梅原猛だから素直な思いを記したと考えられます。東電の原子力発電所の事故以来、新聞、週刊誌、テレビ、インターネット、著書などで、こういう「後悔」の気持を明快に語ったのは、珍しいことではなかったかと思えます。動力試験炉で原発が始まって五〇年近く前以来、さまざまな原子力問題の位相でそれらに反対していた数少ない人たちはともかく、右にあげた醜劣な五つの環は十全に機能して、安全神話が造りあげられてきたことは再説するまでもありません。さまざまな手段を駆使し、巡りめぐって五つの環の多くに「贈収賄」といってもよい類の資金が流れていることも断るまでもありません。学問世界に限っていても、梅原猛のようなかたちでの資金環流はいささか問題があるとはいえ、それ以上に虚偽と頹廢しかもたらさなかった原子力関係の学界、教授・研究者、研究所などに莫大な研究費、研究補助金などの名で資金が何十億円の単位でばらまかれていることなど今更いつても腹立たしいばかりのものであります。

滑稽で悲惨な例を東大と京大に限定し、あえて実名をあげておきます。東大に工学部原子力工学科が設置され、一九六四年に第一期生として卒業し、博士課程を修了するとともに医学部の助手になった安齋育郎という人がいます。この人は、七二年に日本学術会議第一回原発問題シンポジウムで基調演説をしていますから、学者としてもすっかりした人だといえます。けれ

ども、その研究姿勢から安齋氏は大学で研究者として正当に処遇されなく、結局、八六年に立命館大学の経済学部に移籍しています。京大には、小出裕章と今中哲二という「京都大学原子炉実験所」に属する研究者がいます。この二人とも、その著書、論文、活動、発言などを見ますと、しっかりと学者であると判断できます。しかし、反原発ないしは原子力のあり方に批判・懐疑的であるため、二人とも六十歳を超えているにもかかわらず、三十数年間も助教（助手）のままに据え置かれています。いわゆるアカデミック・ハラスメントの典型と見なしてよいものだと思われます。

このような愚昧なことが学問世界のあちこちで発生しつづけている。それでは、文学として、学術（文学）研究としてどのように対処しなければならぬか、ということが問われているはずです。今日話しました作家達、たとえば武田泰淳は「記録」によって、あらゆる事をなすのである」と庄重にいいました。大岡昇平は、「レイテ島の土はその声を聞こうとする者には聞える声で、語り続けているのである」と目に見えない者達における真実の声を啓示したのです。森鷗外は「用と無用とを度外に置いて」生涯、あるいは次代の人へと手渡して学芸を研鑽しなければならぬとの確に宣言しました。埴谷雄高は文学者は「王侯も乞食も貴婦人も娼婦も同一に見るいわば神にも似た視点」を有して、「十年後、百年後の生命をもとうと欲すること」などという考えを言表し、文学の力の作用する圏域を暗示しています。いささか極端だとはいえ、《不可能性の作家》という稀有なあり方をも示唆しておりました。大江健三郎はサ

ルトルが自著の「嘔吐」は無力であるというのに対して、文学の現実の有効性と無効性の両端を往復する苦闘を語っていました。また石川淳は「刻下の現実の相よりほんのすこし速く（中略）空虚なる空間を充実させようとする精神の努力」を小説だととらえ、そのような表現世界を目指すことの重要性について述べておりました。

諸作家の貴重な文学・芸術・研究についての言葉は、わたしが「新しい人類の叡智を蘇生するための『いのちの泉』」と呼んだ根源的生命創出の地点へ一歩でも近づいていく努力に連続しているといえるでしょう。いいかえますと、ドストエフスキイという作家が表現した龐大な人間的・文学的・世界論的な真実の累積——これを「未来の『ドストエフスキイ』という標的」を射貫こうとすることと呼んでおきます——にむかつて一歩一歩接近することだとも考えられます。同時にこれをわたしは文学・芸術に要請されている「森羅万象」に注ぐ眼差しであり、そこに秘められている謎めいた真実を解き明かすことだといいたいのであります。これがすなわち、《文学の力》にほかならないのです。わたし達は想像力や創造的な発想により、いまだ未知の闇に隠された現実の諸相や人間の新しいあり方に光を当てていかねばならないでしょう。三月十一日以降、このような精神的努力はさらに緻密に飛躍的に構想されなければならないといえると思います。

自己鞭撻といった感じで講演を終わりたいと思います。ご静聴くださいまして、ありがとうございます。

（たていし はく・本学教授）



2011年7月9日 国文学会大会にて